

## 第三十九章 独裁者だけの恐怖

独裁者は周辺国民だけでなく自国民にも恐怖心を植え付ける。初めから独裁者ではない。独裁者になるにはかなりの努力が必要だ。その地位を得るまでにそれこそ困難と恐怖を何度も味わったはず。だからこそ自分以外のすべての人間に恐怖を与えなければならぬ。しかし、最後は自分自身が恐怖の意味を悟る。時すでに遅しだが。

独裁者は意外と若いときにその地位を固め始める。だから与える恐怖は中途半端ではない。誰でも肅正する。そして長期間に渡って独裁を続ける。引退することはない。引退は死を意味するからだ。

中には年取って独裁者になることがある。虚勢を張ろうにも身体がついていかない。それどころか老人独裁者はいつ背後から撃たれるか分からないという恐怖心を抱く。もはや独裁者の体をなしていない。

若くして独裁者になっても年老いて独裁者になっても「引き際」が「死に際」になる。だから選挙制度があっても形骸化させる。力尽くで独裁者になっても、都合のいい選挙で独裁者になっても、味方はほとんどいない。周りは付度する敵ばかりになる。部下は忠実に仕えていると勝手に思い込む。付度しているとは思わない。

しかし、政策がうまくいかなくなると厳しく責任を問う。そして叱責して降格させる。させられた方はショックを受けるが、忖度からの開放感に一瞬だが浸れる。代わりにそれまでうだつが上がらなかつた部下が昇進すると解任された元上司は居場所がなくなり開放感が閉塞感に様変わりする。それだけではなく逆に裏切らないか監視される。

新たな部下は忠誠心を疑われないように忖度のレベルを上げる。あるいは求められる。優秀な順に部下を採用してきた独裁者の見る目は肥えているし厳しさを増す。先輩よりいい結果を出さなければというプレッシャーに押しつぶされそうになる一方でいつ首になるかもしれないという恐怖心で萎縮しがちになる。性急に結果を要求する独裁者対して疑心暗鬼が増幅される。そして気がつけばいとも簡単に後任者は潰されてしまう。

この繰り返しが続くと今度は独裁者の疑心暗鬼の方が頂点に達する。それまで押さえてきた感情が表情や言葉にシワを作る。化粧したり小走りしたりして若く見せようとするがシワを隠すことはできないし、つまづいたり転んだりする。それまでの威厳に満ちた仕草にも変化が現れる。年齢よりも若く見えていたが急に年齢以上に老いているように見え始める。

「老けたなあ」

国民の印象が独裁者を襲う。それでも虚勢を張る。全盛期には同じ虚勢でも勢いがあつたが歳をとると虚弱になる。昔取った杵柄を振り回すだけ。

\*

富士山は天候が良ければその雄大な姿をどこからでも見る事ができる。もちろん頂上からも三百六十度のパノラマの世界が広がる。天候が悪ければ富士山がどこにあるか分からないし頂上からも何も見えない。晴天なら誰もが幸福になる。曇れば見向きもされない

ところが人間社会はそうとも言えない。風通しが悪ければ上にいる者からは下の者がよく見えない。上司は部下が何を考えているのかを見極めるのに三ヶ月要すると言うが、部下はたった三日で上司の癖を見抜く。

裸の王様とは独裁者そのものを示す。

「あなた、服を着てください」

と王妃が助言すればいいのだが王妃も裸。それなら

「お父様、裸ですよ」

と王子や王女がたしなめればいいのだが、その王子や王女も裸。裸の王様ではなく裸の一族だ。王宮内では王様を中心に取り巻きも含めオールヌードの生活を送っている。外からは見えないし王宮から出るときは豪華絢爛な衣服をまとっている。

数々の失政がたたって政治の「見える化」要求で抵抗できなくなったか、いつの間にかガラス張り工事が行われて王宮内が文字通り丸裸になる。醜い裸を隠そうとイチジクの葉っぱで局部を覆うがどうしようもない。

そこに毒リンゴをくわえたへビが現れる。

「独裁者は毒を持っている」

そう言いながらイリは口を手で覆う。

「私って毒なの？」

急変するイリに加藤も榊も腰が引ける。ノロなら対応するのだろうが二人には無理だった。

「ノロはいつも私のことを独裁者呼ばわりしていた。と言うことは私はいつも裸だったわけ？」  
イリの口調は独裁者風に変化する。

「アイツは私を裸にして独裁者に仕立ててニヤニヤ見つめていた！ 超スケベーな奴！ 許せない！」

ここまで来ると加藤も榊も後ずさりするしかない。

「お待ち！ あなたたちも私の裸を見ていたのね！」

「滅相ありません。落ち着いてください」

「落ち着く？ 冷静よ！」

榊があえて反論する。

「イリ女王。あなたは独裁者特有の恐怖に畏にはまっている」

宇宙戦艦の艦橋の浮遊透過スクリーンにクリーム大橋を疾走するスネークライナーの映像が現れる。

\*